

【Insectopia (インセクトピア)】とは: insect (虫) と utopia (理想郷) を掛け合わせた造語『蟲たちを含む、地球上に生きる全ての仲間が快適に生きることができる世界』を創るため、SHELLグループがお届けする情報発信ニュースレター。



人はなぜ虫を嫌うのか？

夏の夜、部屋に入り込んだ一匹に思わず身構える。道端で虫を避けて歩く。そんな経験は、多くの人に共通するのではないのでしょうか。ではなぜ、私たちは虫に対して嫌悪感や苦手意識を抱くのでしょうか。そしてもし、虫が地球上からいなくなったとしたら——それは本当に人にとって「幸せなこと」なのでしょうか。今回は、“虫嫌い”という感情と、虫たちが担う役割について、あらためて考えてみます。

人が虫を嫌う原因

■本能としての「嫌悪感」

虫に対する嫌悪感の一部は、人間が進化の過程で身につけてきた“防御反応”ではないかと考えられています。毒をもつ生物や病気を媒介する可能性のある存在を避けることは、生存にとって有利に働いてきたといわれています。また、病気を媒介しなくても、脚の多さや不規則な動き、大量発生などによって不安や不快感を与えることも、虫が嫌われる要因の一つと考えられます。こうした虫は「不快害虫」と呼ばれています。

■都市化が生んだ“未知への恐れ”

一方で、現代ならではの背景も考えられます。都市化が進むにつれ、虫と触れ合う機会は減少傾向にあります。かつては身近だった存在が、「よく知らないもの」になりつつあるのかもしれない。未知のものに対して、人は不安や恐れを抱きやすいものです。

「危険かもしれない」という曖昧な印象が、虫への抵抗感を強めている側面もあるのではないのでしょうか。

■「みんなが嫌うから嫌う」という空気

虫嫌いは、社会的に共有されている感情でもあります。テレビやSNSでは、虫を避けたり怖がったりする反応が、当たり前のように描かれています。そうした積み重ねの中で、「虫が苦手であること」が自然な前提となり、その感覚が少しずつ強められているとも考えられます。人の感じ方は、周囲の価値観の影響を受けやすいものです。

もし虫がいなくなったら？

では、多くの人が「いなくなってほしい」と感じる虫たちが、本当にこの地球上からいなくなったとしたら、どうなるのでしょうか。

一見、快適になるようにも思えます。しかし、その影響は決して小さくないと考えられています。虫は、落ち葉や生き物の遺骸を分解し、自然の循環を支える役割を担っています。また、植物の受粉を助けるものも多く、農作物の生産とも深く関わっています。さらに、鳥や魚など多くの生き物の食料にもなっており、その存在は生態系全体とつながっています。もしそれらが失われれば、環境のバランスは大きく崩れ、結果として人の暮らしにも影響が及ぶ可能性があります。

減りつつある虫たちと、これから

実際に近年では、都市化や農薬、気候変動などの影響によって、虫の数が減少しているともいわれています。「嫌い」という気持ちの一方で、その存在自体が少なくなりつつあるという現実もあります。虫への感情は人それぞれですが、ただ遠ざけるだけでなく、その役割にも少し目を向けてみることで、それが、これからの環境との向き合い方のヒントになるのかもしれない。

8thCALは、アート展「害蟲展」の開催を通じ、害虫の在り方や人との関係性について考えるきっかけづくりを行っています。今年の開催内容については、ぜひ裏面をご覧ください！



害蟲展season7 7月11日より開幕

いよいよ害蟲展season7の開催まであと約1カ月となりました。本展は、「害虫」という存在をアートを通じて見つめ直し、その価値観や在り方について考える企画展です。多くの作家の皆さま、スポンサー企業、ご協力いただく関係者の皆さまに支えられ、今回で第7回を迎えることとなりました。今回も数多くのご応募をいただき、誠にありがとうございました。どの作品が選ばれるのか、最終結果の発表をどうぞお楽しみにお待ちしております！

害蟲展season7 特設ページ開設

最終結果発表は7月上旬公開予定です！



審査員紹介



丸山 宗利
昆虫学者



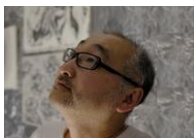
館野 鴻
生物画家



満田 晴穂
自在置物作家



中峰 空
箕面公園昆虫館
館長



服部 雄二
Double Tall Art
& Espresso Bar
オーナー



岡部 美楠子
8thCAL株式会社
代表



メインビジュアルは「ニセセマルヒョウホンムシ」

ニセセマルヒョウホンムシは、昆虫標本や乾燥した有機物を餌とする小さな昆虫です。標本を食べる性質から、博物館やコレクションの管理の現場では「害虫」として区別されることがあります。

その一方で、自然界では動物の遺骸や有機物を分解し、物質循環の一端を担う存在でもあります。こうした性質を知ること、は、「害虫」と呼ばれる理由を考えるきっかけになるのかもしれない。

会期情報

【東京】MATERIO base ※休館日：月・火
日時：7月11日(土)~7月30日(木) 13:00~20:00
【大阪】箕面公園昆虫館 ※休館日：火
日時：9月2日(水)~9月14日(月) 10:00~17:00

今月のInsect



写真/解説
中峰 空
8thCAL技術顧問
箕面公園昆虫館館長



ラクダムシ (駱駝虫)

ラクダムシ目ラクダムシ科
学名：Inocellia japonica

和名は前胸が伸び、中胸が少し膨らむことに由来するとされる。中生代に栄えた昆虫で、起源は中世代三畳紀にまで遡る。現生種は2科250種ほどの小さいグループでユーラシア、アフリカ北端、北米西部から中米にかけて分布する。

Information

● 害蟲展オリジナルグッズ販売中

害蟲展season7のオリジナルグッズも販売予定！
過去グッズもお買い求めいただけます♪
→ご購入は[こちら](#)



● 害蟲展公式SNSフォローお願いします！



害蟲展公式X



害蟲展公式Instagram

ECOSYSTEM.EXHIBITION

Insectopia インセクトピアの配信登録はこちらから！

QRコードを読み取り後、登録フォームよりご登録ください。
ニュースリリースや採用情報、イベントなどの最新情報を
配信中です。

